

2014年度 国語(中)部会研究計画

I 研究主題

生徒が生き生きと取り組み、確かな国語の力をつける授業の創造

～すべての学習の基礎となる、豊かな言語感覚を育成するために～

II 研究目的

1. 研究の経過

2002・2003年度	『言語活動に主体的・創造的に取り組もうとする生徒を育てるために』
2004・2005年度	『言語活動に主体的・創造的に取り組もうとする生徒を育てるために』 ～目指すもののはっきりした授業の追究～
2006・2007年度	『生徒一人一人が生き生きと活動し、確かな国語の力を育てる授業の創造』 ～基礎基本を身につけ、豊かに“伝え合う”生徒の育成をめざして～
2008・2009年度	『伝え合い、高め合う授業の創造』 ～思考の深まりを伴う言語活動の工夫を通して～
2010・2011年度	『伝え合い、高め合う授業の創造』 ～伝えたい思いを引き出す言語活動の工夫を通して～
2012・2013年度	『国語を正確に理解し適切に使える「言語能力」の育成』 ～言語知識・技能の習得から活用を目指した指導の工夫～

過去10年間は、「話す・聞く」「書く」「読む」の領域別で研究を進めてきた。併せて「各部会員が導入した選択教材」や「独自の授業手法」をレポート形式で報告・交流する場を設定しながら研究してきた。言語活動に主体的に取り組む姿勢と能力を高めながら、現在求められている「伝え合う力（コミュニケーション能力）」の育成を目指した学習活動に取り組んできた。

2012年度からは、以下の点を意識した研究の推進がより必要と考え、指定教材を設けて研究を進めてきた。

- 1 「基礎的基本的な知識及び技能の確実な習得」
- 2 「基礎的基本的な知識及び技能を活用するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力の育成」
- 3 「主体的に学習に取り組む態度の養成」

【成果】

一昨年度に続き、①「各教科の基盤としての国語科の役割」②「教材研究の深化」③「教師の言語力向上」の3点を重点に研究を行った。説明文の共通する指導事項について年度初めに事務局より提示し、部会員が視点を共通理解したうえで教材研究にあたることができたものと思われる。

二次研究協議会の中では、公開授業をもとに各自の理論・実践を交流することができた。説明的な文章の授業展開については、文学作品以上に模索していた部会員も少なくなかったことから、分科会では「単元の配列はどうしているか」「指導時数はどう設定しているか」「教師間の連携はどうしているか」など、より現実的な悩みについて交流することができた。また、公開された授業やレポートが部会員の日々の実践に資するものとなり、「管内共有の財産」として蓄積することができた。「研修会β」枠で行った安藤氏の講演では、現在の生徒の実態とそれに対応した授業のあり方が提起され、新鮮で有意義な視点を獲得することができた。

【課題】

指定教材を設けての研究の2年目であった。昨年度は「小説・物語教材」、今年度は「説明文教材」を扱ったが、指定教材を変更したことで、研究の深まりが得られなかったこと、またそれ以外の分野への研究が進められていないことなどが課題として挙げられる。より幅広い分野を網羅しつつ、研究が体系的に積み重なっていくような研究体制の確立が求められる。全体会②のあとに分科会②（レポート交流）を企画したが、30分程度の短い時間となったため、交流時間の不足を指摘する声もあった。

以上を踏まえ、この2年間の課題を解決し、成果を補充・深化させる方向で研究を進めるとともに、研究を体系的に積み上げる方策を講じたい。

2. 主題設定の理由

上記のように、この2年間、国語（中）部会では、各教科学習における言語活動の基盤となる言葉力や身に付けた言語能力を活用し、さらに高度な学習や主体的な学びに活かしていける、より総合的な言語能力の育成をめざして研究を進めて来た。

そのような「総合的な言語能力」をつけさせるためには、生徒が意欲的に学習活動に取り組もうとする魅力的な授業を展開することが大切である。

魅力的な授業とは、今日何がわかればよいのかを生徒自身がつかみ、「やってみよう」と思える授業であり、その活動を通して「わかった」「できた」「自分の思いを持てた」「自分の思いを伝えられた」「級友の思いを受け止められた」という達成感や仲間との共感・所属感を持てる授業である。

教材で何をどう教えるか、指導者の判断や分析によって大きく変わるのが国語という教科の特徴と言える。であるからこそ、教材を深く読み取り、教材価値を明らかにし、「ねらい」を明確にして教材全体を貫く構想を立て、1時間1時間の展開を工夫することで、生徒が目を輝かせて生き生きと学ぶことができる。生徒がそのように学ぶことで、わたしたちが目指す確かな国語の力をつけることができると考え、本主題を設定した。

これまでの研究会で、生き生きと学ぶ生徒の姿を数多く見て来たが、部会員一人ひとりが自分自身の1時間1時間に当てはめると、必ずしも「どの時間も目を輝かせて学んでいた」とは言えない時間もあったかと思われる。しかし、研究会で公開される授業の裏には何十時間も準備があり、毎時間の授業に際して研究会と同じような時間を割くことはできないのが実情である。そこで、指定教材を設けて共同研究し、部会員の「このように展開したら生徒の目が輝いた」という報告を追試・追実践し、データベース化することで、何十時間の準備を経た授業を、部会員各自がもうすこし少ない準備時間で実践でき、研究が部会員全体のものになるのではないかと考えた。

3. 研究仮説

- (1) 作品の教材価値と、「ねらい」を明確にして、教材分析や教材構想を立て、授業のさまざまな指導場面においてどのような言語活動ができるかを見通し、その展開を工夫することによって、生徒が生き生きと取り組み、確かな国語の力をつけることができる。
- (2) レポート等に示された部会員の実践の追試や改良で、生徒が生き生きと取り組む、魅力的な授業を作り上げることが豊かな言語感覚の育成につながる。

Ⅲ 研究内容

1. 研究の視点

研究主題の解明のために、次の四つの視点を中心として各部会員が研究を進め、その成果と課題を市町村及び管内の第二次研究協議会に持ち寄り、共有化を図るとともに、データベース化をめざす。

- (1)① 作品の教材価値を見出し、「ねらい」を明確にした、教材構想の工夫。
- ② 生徒が目を輝かせて取り組む指導の工夫。
- (2)部会員のレポートに追試や改良を加える試み。
- (3)指導者である教師自身の言葉力（知識・言語感覚・読解力等）を高める取り組み。

2. 具体的な取組内容

上記の研究の視点に沿い、各部会員が以下のような具体的な取組内容・方法で研究・実践を行う。石教研第二次研究協議会場で、この視点にもとづいた研究授業や分科会や話し合い活動等を行い、検証する。

(1) 作品の教材価値を見出し、「ねらい」を明確にした教材構想の工夫。

「ねらい」を明確にした教材構想の工夫。

- ①「指定教材」を設定し、昨年度・一昨年度の課題を踏まえて個人研究を進める。
- ②石教研第二次研究協議会において、基本的に「指定教材」の題材をもとに公開授業を行う。
- ③公開授業・個人研究をもとに活発な議論を行い、効果的な指導法についての方向性を探る。

* 「指定教材」について……追試・追実践のために今年度は過去2年間の指定教材すべてを対象とする

2013年度 説明文教材

- 1年生：「ちょっと立ち止まって」「シカの落ち穂拾い」「流氷と私たちの暮らし」
- 2年生：「やさしい日本語」「メディアと上手に付き合うために」「きみは最後の晩餐を知っているか」「モアイは語る」
- 3年生：「月の起源を探る」「論理の展開に着目して読もう」「ネット時代のコペルニクス」

2012年度 小説・物語教材

- 1年生：「星の花が降るころに」「大人になれなかった弟たちに…」「にじの見える橋」
- 2年生：「旅する絵描き-パリからの手紙」「盆土産」「アイスプラネット」
- 3年生：「蟬の声」「高瀬舟」「握手」

(2) 部会員のレポートを追試・追実践し、改良を加える試み。

- ①昨年度部会員の研究成果を教材ごとにまとめ、事務局より提示する。
- ②過去2年間のいずれかのレポートに沿った、あるいは改良を加えた授業を実践し、検証する。

(3) 指導者である教師自身の言葉力（知識・言語感覚・読解力等）を高める取り組み。

- ①理論（実技）研修会をうけ、各自が実践を行ってレポートを作成し、その成果と課題を交流する。
- ②石教研第二次研究協議会において、「指定教材」を共同で教材分析する時間を設ける。

IV 研究方法

1. 実践検証の方法

- (1) 部会員全員で研究できるように、部会員個人の研究テーマを明確にする。
- (2) 個人レポートは、年度当初に示された「指定教材」についての実践をまとめ、作成することを基本とし、発展教材も可とする。
- (3) 「地域サークル」で検討し、研究を深める。
 - ① 各市町村単位で「地域サークル」を組織し、推進委員を中心に地域単位での共同研究を行う。
 - ② 「研究計画（内容）」を市町村単位で明確にし、研究主題解明に向けた研究実践を積み重ねる。
 - ③ 「成果と課題」について、地域サークルで議論を行った上、石教研第二次研究協議会に持ち寄る。
- (4) 二次研究協議会の研究授業と個人レポート等のデータベース化を目指し、必要に応じて使える財産とする。

2. 各種研修会の実施

研究主題解明や指導技術向上のために研修会を実施する。

- (1) 理論研修会…例 言語能力養成の示唆になる事柄についての研修（専門的内容）
- (2) 実技研修会…例 生徒が生き生きと取り組む授業の工夫についての研修（実践的内容）

3. 「部会情報」の発行

日常実践の交流や研究資料の提供を行うために、「部会情報」を年4回、事務局が発行する。

4. 教育課程の研究

学習指導要領にもとづき、これまで積み重ねられてきた実践・研究成果を活かしながら、部会員の意見・要望を集約して編成・改訂を行う。

5. ホームページの更新

部会員の交流や研究成果の発信などのため、ホームページの更新・充実に努める。

V 研究体制

1. 地域サークル

- (1) 推進委員を中心に研究の推進を図り、各学校の研究責任者とともに、「学年別」の研究センター（授業者）を選出するなど、共同研究の体制作りを行う。
- (2) 授業公開をもとに、日頃の研究実践を交流し、主題の解明を図る。
- (3) 第二次研究協議会の各分科会の司会者・記録者は、部会役員が中心となって人選し、依頼する。

2. 研究センターサークル

- (1) 中心サークルは管内第二次研究協議会における会場（授業・全体会）を受け持ち、年度当初に示された研究の視点に基づいて、「学年別」に授業を公開することを原則とする。
- (2) 2014年度の中心サークルは「石狩」である。次年度以降は江別→千歳→恵庭→北広島の予定。

3. 研究推進委員会

部会役員と各市町村推進委員で研究推進委員会を組織し、研究計画の具体化、研究成果の集約、管内第二次研究協議会の運営等について研究協議する。なお、研究の継続と深化を図るために、部会役員と各市町村推進委員の任期を原則として2年とする。

VI 年間計画

月	各種研究協議会・諸会議	役員会・推進委員会	具体的研究活動	その他の活動
4月	石教研第一次研究協議会 各市町村第一次研究協議会	本年度研究の 提案・説明	研究計画にもとづ く個人研究の立案	
5月			研究実践①	「部会便り①」発行
6月	理論研修会	計画・準備・運営		「部会便り②」発行
7月				
8月				
9月	各市町村第二次研究協議会 実技研修会	計画・準備・運営	市町村サークル での中間交流 研究実践②	「部会便り③」発行
10月	石教研第二次研究協議会	計画・準備・運営	研究成果と課題 の全体交流	
11月				「部会便り④」発行
12月				
1月		次年度研究計画 の策定		
2月	各市町村三次研究協議会	本年度研究の総括		
3月		次年度研究体制 づくり		